

昨年12月5日から7日、東京・原宿でETHICAL DESIGNを事業の核とする船GN WEEK TO場（東京・港）で、今KYO 2024が開回は広告・イベント大催され、約6000人



カンファレンスのようす

る。参加した協創パートナーは、個人から廃棄物処理業者、上場企業、排出事業者、素材メーカーと幅広い。展示される内容も、個人で海岸で拾った廃プラスチックか

動静脈連携が進める新たな潮流

ETHICAL DESIGN WEEK TOKYO 2024

資源循環推進に向けて積極的な動き

ら作成したアクセサリを作るグループ、リサイクル石膏ボードや廃プラスチックリサイクル製品、広葉樹などの未利用木材、廃材から作成されるさまざまな電球カバー、建物の改築時に発生し価値を生むこともある古材など多様だ。

特徴的なのは動脈と言われる企業が資源循環に向け積極的に事業を進めていることだろう。これまでリサイクルや環境に向けて動脈企業の取り組みは単発のプロジェクトが多く、期間が終わってしまえば、プロジェクト

は実績というペーパーにしか残らないことも少なくなかった。しかし船場は処理業者と連携し内装工事で発生する廃棄物のリサイクル率を高める取り組みなどを積極的に進めており、リサイクルや再生品を使うことや環境への配慮をすることが「エシカル」であると

いう新しい価値観を発信している。この動きは船場だけではない。同じ内装工事大手のスペースでも新たにリプロダクト推進室を設置し、資源循環に向けた取り組みを進めている。他、積水ハウスでは昨

年12月、2050年に向け「循環する家」としてHouse to Houseの実現を目指し、3万点以上からなる家の部材を見直し、リサイクル部材（リユース、リニューアブル等を含む）だけで構成された家づくりを進めることを明らかにした。

会期中2日目にオープンスペースで行われた「資源循環 サークルエコノミーのリアルと未来」というカンファレンスでは、チヨタウーテ、リファインパース、緑川化成工業、大手デベロッパー

の森ヒルの担当者が参加し、博展の白川陽一氏の司会のもとパネリストとして、意見交換を行った。ここではサーキュラーエコノミーに社会が移行する際に重要なポイントについては、各パネリストから、各ステークホルダーが信頼関係を醸成し連携していくこと、協業を進めながらリサイクルを前提としたものづくりをしていくこと、経済合理性を持つた仕組みを作ること、行政もエンドユーザーがベネフィットを感じられる仕組みを作ることなどが挙げられた。